第３学年〇組

国語科学習活動指導案

指導者　秦　雄輔

活動主題　「メディアの未来について考える～新聞に未来はあるのか～」

活動の価値

近年、情報化社会の到来とともにメディアは目覚ましい発達を遂げている。多様なメディア環境に身を置く現代の子どもたちは膨大な量の情報に振り回されることなく、適切に付き合っていかなければならない。本教材『いつものように新聞が届いた―メディアと東日本大震災』には東北の地方新聞社が、被災者の心と生活を支える確かな情報を届け続け、今も使命感を持って震災を伝え続けていることが書かれている。全国紙と地方紙の言葉の使い方の違いについても触れているため、言葉の使い方による印象の違いや、言葉の背後にある意図を考える学習にも適している。情報を発信者の側から捉えたこの文章を扱うことは、今まで主に受信者として情報と関わってきた子どもたちが、改めて情報やメディアの意義を考え直す機会になると考えている。

本活動は、「新聞に未来はあるのか」という問いを出発点に、「メディアの未来」について考え、これからの情報と人の関わりについて考えを深める活動である。本活動を通して子どもは、情報の信頼性を確かめる方法について理解して使うことができるようになる。また、表現の仕方を考えたり適切な資料を引用したりするなど、自分の考えがわかりやすく伝わるように工夫することができるようになる。さらに、情報やメディアについて考えたり理解したりしたことを今後の自分の生活と関連付けて考えようとする態度を育むことができるため、大変意義深い活動である。

子どもの実態

本学級の子ども（〇名）はこれまで主に、受信者として情報とどう向き合うのかを考える学習をしている。事前アンケートでは、「メディアと聞いて思い浮かぶもの」として、〇名が「インターネット」、〇名が「新聞」を挙げていた。しかし、「自分が普段利用するメディアは何か」という質問に「新聞」と答えた子どもはわずか〇名であった。また、「災害時に役立つメディア」として一番多く挙がったのは「ラジオ」で〇名だった。一方で、「災害時に役に立たないメディア」については「テレビ」〇名、「インターネット」〇名、「新聞」〇名であった。主な理由として、「テレビ」は「電気の問題」、「インターネット」は「回線の混雑やフェイクニュースの多さ」、「新聞」は「災害時には届かない、情報の鮮度が低い」などが挙がった。さらに、「情報と関わる上で大切なこと」として、〇名の子どもが「正しい情報かどうか疑う」など、批判的に情報を捉えることに関する記述をしていた。

以上のことから、子どもたちを取り巻くメディア環境はインターネットが中心となり、新聞は今や子どもたちにとって身近なメディアではなくなっていることがわかる。しかし、子どもたちは普段身近にあるインターネットの情報の中には正確さを欠いたものがあることも理解している。子どもたちにとって、メディアとは人が人に伝えるために情報を選び抜いて伝えていること、またそこにある記者たちの思いや葛藤について学習することは、情報化社会において、多様なメディア環境の中で主体的に情報と関わっていかなければならない子どもたちが情報の背後にある発信者の意図を想像したり、言葉で表現し発信することの責任について考えたりすることに繋がるため、大変意義深いと考える。

活動の指導観

本活動では、発信者の立場や意図によって、伝える情報の選択や伝え方・伝わり方に違いが出ることを理解できるようにするとともに情報やメディアとの向き合い方について考えを深めることができるようにすることをねらいとする。

- 一次では、学習課題を設定することができるように、事前アンケートの結果をもとに、身近なメディアについて考えを共有する場を設定する。また、自分の考えの変容を記録することができるように、適宜自分の考えをふり返りシートに記入する時間を設ける。
- 二次では、発信者の立場や意図によって、伝える情報の選択や伝え方・伝わり方に違いが出ることを理解することができるように「附中トピックス」という記事を作成し発信者を体験する活動を設定する。その際、社会と自分を関連付けて記事の内容を決定できるように、全校生徒および教職員に実施した学校生活に関するアンケートの結果を活用する。また、発信者の意図が読者に伝わっているか確認するために、記事を読み合い、意見交流し、推敲する場を設定する。
- 三次では、情報やメディアとの向き合い方について考えを深めることができるように、今後のメディアの在り方や自分との関わりについて考えたことを交流する場を設定する。

○　子どもの学習目標

意図をもって情報を編集し、伝える言葉を吟味しながら、読者のニーズに合った附中トピックスを作成する。

○　教師の指導目標

発信者の立場や意図によって、伝える情報の選択や伝え方・伝わり方に違いが出ることを理解できるようにするとともに情報やメディアとの向き合い方について考えを深めることができるようにする。

活動計画（９時間）

次	時	学習活動・内容	子どもの問いと思考	指導のねらい・内容・方法
一	1 ①	1　事前アンケートの結果を共有し、学習課題を設定する。 (1) アンケート結果を共有しメディアの意義を考える。 ・信頼できるメディア ・アメリカの新聞紙離れ (2)　学習課題を設定する。 学習課題 メディアの未来について考えよう。	メディアは私たちの生活に必要なものなのかな。 身の回りのメディアについてもっと知りたいな。	学習課題を設定することができるようにする。 ・学習課題を設定できるように、事前アンケートの結果をもとに、身近なメディアについて考えを共有する場を設定する。 ・自分の考えの変容を記録することができるように、現時点の考えをふり返りシートに記入する時間を設ける。
	1 ③	2　本文を通読し、内容を整理する。 (1)　三人の記者の震災体験を整理し、見出しを読み比べる。 ・新聞記者と災害 (2) 全国紙と地方紙の見出しを読み比べて違を考える。 ・「死者」と「犠牲」の違い ・地方記者の心情 ・新聞社の使命 ・発信することの責任	私たちの身の回りにある情報は誰がどうやって発信しているのかな。 記者の情報発信には、一つ一つの言葉選びに大きな責任が伴うものなんだな。	発信者の立場や意図によって、伝える情報の選択や伝え方・伝わり方に違いが出ることを理解できるようにする。 ・記事の内容が発信者の心情と関連することに気づけるように、三人の記者の災害当時の様子と記事の見出しを読み比べる活動を設定する。 ・発信者の責任に気づくことができるように、他誌とは違う言葉を使った記者の葛藤を確認する場を設ける。
二	2 ④	3　附中トピックスを作成する。 (1) 社会生活の中から題材を決める。 ・スマートフォン持ち込み ・校則の是非 (2) 記事を作成する。 ・掲示場所と読者層の想定 ・必要な情報の収集 ・記事にする情報の吟味 (3) 記事に見出しをつける。 ・発信者の意図と読者の印象 ・類義語による言葉の言い換え (4) 記事全体を推敲し仕上げる。 ・推敲と校正の違い	情報を発信する際にはどんなことに気をつければいいかな。 相手に応じて言葉や内容を選んで使うことで同じ内容でも違う印象を与えることができるんだな。	・社会と自分を関連付けて記事の内容を決定できるように、学校生活に関する校内アンケートの結果を活用する。 ・発信者の意図によって、伝える情報の選択や伝え方・伝わり方に違いが出ることを理解できるように、実際に情報を発信する活動を設定する。 ・発信者の意図が読者に伝わっているか確認するために、記事を読み合って意見交流し、推敲する場を設定する。
三	1 ①	4　学習全体をふり返る。 (1)　学習全体をふり返って、学習課題について自分の考えをまとめる。 ・メディアの未来 ・メディアとの向き合い方 (2)　考えたことを交流する。	これからメディアはどうなるのかな。 情報と関わる時には言葉を大切にしていきたいな。	情報やメディアとの向き合い方について考えを深められるようにする。 ・情報やメディアとの向き合い方について考えを深められるように今後のメディア在り方や自分との関わりについて考えを交流する場を設定する。

本時（３／４）

本時　第３学年〇組教室　第二次の２時（３／４）

本時の指導観

前時までに子どもは、「いつものように新聞が届いた―メディアと東日本大震災」を読み、全国紙と地方紙の言葉の使い方の違いや、記事に込められた記者たちの思いなどを学習している。また、「附中トピックス」と題した情報発信紙を発行する活動に取りかかり、掲示場所に合わせた読者の想定、読者のニーズを考慮した記事内容の決定、情報収集、原稿の下書きを行い、メインとなる記事を誰のものにするのかを話し合っている。そこで、本時は、発信者の意図によって伝える情報の選択や伝え方・伝わり方に違いが出ることを実感できるように、見出しを作成する活動を設定する。

主眼

相手に応じて言葉や伝える情報を取捨選択し、意図をもって使い分けることで、同じような内容でも違った印象を与えることができることを理解し、自分の文章に活かすことができる。

本時の過程

学習活動・内容	指導のねらい・内容・方法	形態	配時
1　本時の見通しを持つ。 （1）　前時の学習内容を想起し、目指す見出しについて考える。 ・読者のニーズ・目指す見出し（の条件） （2）　めあてを設定する。 編集会議を行い、記事の主見出しを作成しよう。	本時の活動の見通しを持つことができるようにする。 ・本時の活動の見通しを持つことができるように、身近な見出しの例を挙げ、前時までの学習内容と見出し作りを関係づけ、めあてを設定する。	学級集団	10
2　附中トピックスの主見出しを作成する。 （1）　主見出しの案を考える。 ・紙面の顔となる主見出しの役割 ・想定する読者に合わせた言葉選び ・記事の中心的な内容と付加的な内容 ・見出しの文字数 （2）　主見出しについて考えを交流する。 ・記事内容と見出しの関連 ・語感 ・発信者の意図と読者の印象の違い ・言葉の精選 （3）　見出しを発表し合い、ポイントをまとめる。 ・情報の受信者の想定 ・受信者のニーズの考慮 ・言葉が与える印象の考慮 ・情報の正確性	相手に応じて言葉や伝える情報を取捨選択し、意図をもって使い分けることができるようにする。 ・読者に合わせて見出しに使う記事の内容を選択できるように、記事の中心的な内容と付加的な内容を整理する場を設ける。 ・読者に合わせた言葉選びができるように、類義語辞典やネットを活用して類義語を検索し、最適な言葉を考える場を設定する。【吟味思考】 ・見出しの印象を視覚的に共有できるように附中トピックスのレイアウト例を配付し、実際に見出しを書き込めるようにする。 ・発信者の意図が表現に表れているかを確認できるように、記事の内容の選別や言葉選びのねらいを明確にして説明する場を設定する。【吟味思考】	個／小集団／学級集団	30
3　本時のふり返りをする。 ・次回小見出しを作成する際に生かしたいこと ・次回記事を推敲する時に生かしたいこと	情報を発信する時に気を付けるべきポイントを踏まえて、次時の活動にどう生かすかを考えることができるようにする。 ・情報を発信する時に気を付けるべきポイントを踏まえて、次時の活動にどう生かすかを考えることができるように、本時学習を振り返り、次時の活動の見通しをもつ場を設定する。	個	10

活動の評価規準

知識・技能	・理解したり表現したりするために必要な語句の量を増し、語彙を豊かにしている。 ・文章の種類とその特徴、情報の信頼性の確かめ方について理解して使っている。
思考・判断・表現	・「読むこと」において、文章を読んで考えを広げたり深めたりして、情報やメディアについて自分の意見をもっている。 ・「書くこと」において、目的や意図に応じて、社会生活の中から題材を決め、集めた材料の客観性や信頼性を確認し、伝えたいことを明確にしている。 ・「書くこと」において、表現の仕方を考えたり資料を適切に引用したりするなど、自分の考えがわかりやすく伝わる文章になるように工夫している。 ・「書くこと」において、読み手からの助言などを踏まえ、目的や意図に応じた表現になっているかなどを確かめて、文章全体を整えている。
主体的に学習に取り組む態度	・自身の経験を踏まえて、学習課題について考えたことをまとめようとしている。 ・積極的に学習課題に沿って自分の考えを主張しようとしている。

※知：知識・技能　　思：思考・判断・表現　　態：主体的に学習に取り組む態度

次	時	学習活動	評価規準（観点：方法）	指導の個別化
一	1 ①	1　事前アンケートの結果を共有し、学習課題を設定する。 (1) アンケート結果を共有しメディアの意義を考える。 (2)　学習課題を設定する。 学習課題 メディアの未来について考えよう。	・自身の経験を踏まえて、学習課題について考えたことをまとめようとしている。(態：学習プリント)	新聞が身近でない場合は、他のメディアと比較して、新聞の特徴を考えたり、評価したりするよう助言する。
二	1 ③	2　本文を通読し、内容を整理する。 (1)　三人の記者の体験を整理し、書かれた見出しを見比べる。	・「読むこと」において、文章を読んで考えを広げたり深めたりしている。(思：学習プリント)	記者の体験について書いてある部分に着目するよう助言する。
		(2) 全国紙と地方紙の見出しを読み比べて違いを考える。	・理解したり表現したりするために必要な語句の量を増し、語彙を豊かにしている。(知：事後のテスト)	新出漢字に線を引き、読みや意味を書き込んでおくよう助言する。
	2 ④	3　「附中トピックス」を作成する。 (1) 社会生活の中から題材を決める。	・「書くこと」において、目的や意図に応じて、社会生活の中から題材を決め、集めた材料の客観性や信頼性を確認し、伝えたいことを明確にしている。(思：学習プリント)	想定している読者はアンケートにどのような回答をしているか確認するよう助言する。
		(2) 記事を作成する。 (3) 記事に見出しをつける。	・文章の種類とその特徴、情報の信頼性の確かめ方について理解して使っている。(知：学習プリント)	情報を利用する前に発行元や発行日を確認するよう助言する。
			・「書くこと」において、表現の仕方を考えたり資料を適切に引用したりするなど、自分の考えがわかりやすく伝わる文章になるように工夫している。(思：学習プリント)	類義語などを検索して置き換えたり、漢字やひらがな、カタカナを使い分けて印象の違いを確認したりするよう助言する。
		(4) 記事全体を推敲し仕上げる。	・「書くこと」において、読み手からの助言などを踏まえ、目的や意図に応じた表現になっているかなどを確かめて、文章全体を整えている。(思：学習プリント)	仲間の意見を踏まえて、想定している読者、自分の意図を見直して、関連づけてみるよう助言する。
三	1 ①	4　学習全体をふり返る。 (1) 学習全体をふり返って、学習課題について自分の考えをまとめる。 (2) 考えたことを交流する。	・積極的に学習課題に沿って自分の考えを主張しようとしている。 （態：様相観察）	ふり返りシートを読み返し、これまで着目してきた言葉を整理するよう促す。

本活動の見所

○　国語科の研究主題・副主題

言葉への自覚を高める国語科学習指導法の研究

「言葉への自覚を高める」とは

　言葉を手段として適切に用いることのできる能力を高めるとともに、「言葉とは･･･」という問いに答えられるような、言葉そのものを見つめる視野を拡充すること。

「吟味思考をはたらかせるリフレクション」とは

　自分の考えを表し伝える言葉はこれで十分か、自分の考えそのものはこれでよいか、と再検討することを「吟味思考」とよび、そのような振り返りの行為を「リフレクション」とする。

○本授業における「言葉への自覚を高める」

「附中トピックス」の作成

　本活動では、「言葉への自覚を高める」ための学習活動として、「附中トピックス」と題した情報発信紙を作成する活動を行う。その際、情報発信紙を掲示する予定の場所をあらかじめ指定することで、読者層を想定できるようにする。そして、読者層に応じた話題の選定、発信する情報の選別を行い、記事や見出しの作成を行う。特に見出しを作る上では、自分の伝えたいことを端的に、なおかつ読者の興味を引く言葉を使って表現することがポイントとなる。短い文の中にどのような情報をどのような言葉を使って表現するのかを考えることは言葉を吟味することに直結し、言葉を吟味することで、「言葉への自覚を高める」ことができると考える。

○本授業における「吟味思考をはたらかせたリフレクション」

「附中トピックス」の記事の内容と見出しの吟味

　本活動では、上述の通り読者に合わせて提示する情報や使う言葉を吟味する活動を行う。その際に「別の言葉はないか」と検証することは、一度自分の考えを俯瞰し、そこで表そうとしている内容自体を再考することにもつながる。日本語には類義語が数多く存在しており、単純に言葉の意味だけを比べるとどれを選んでも正解と言えるような場面が存在する。そのような時に、自分の感情や意図に一番適した言葉を選ぶ力が語彙力であり、そこに言語感覚や言葉のもつ価値の理解が含まれていると考える。吟味思考をはたらかせるリフレクションを随所に設定すれば、自分の感情や意図に適した言葉選びができているかどうか、子どもたちは自問自答しながら使う言葉を検討するだろう。そうして言語感覚は磨かれ、言葉のもつ価値に気付いていくことが期待できる。